

# ああ、相談業務

## ～ 海斗君の話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

14

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

学校現場では、発達障害があると疑われる子が通常学級に10%近く存在している。ADHDや自閉症スペクトラム障害などが主であるが、精神発達遅滞の子も混ざっている。そういう子どもたちの対応に手を焼き、学級崩壊状態になってしまった先生方に何人も会って来た。今回は、問題児とされ、学級崩壊の原因とされた子どもをめぐって学校の先生の支援を行った事例である。

### 家族

海斗君は小学校5年生、父親は38歳、母親は36歳、中学校1年生の姉と小学校2年生の弟の三人兄弟の真ん中である。父親は公務員、母親は日中パートで働いている。家は新興住宅街に新築で建てられた一軒家であった。父親は道外出身で、父方祖父母や兄弟は皆、本州在住で健在。母方祖父母や兄弟は、道内だが道南在住で、健在。父親

の仕事の関係上、転勤が多かった。今回家を建てたのは、姉が中学に入ったからで、今後は父親の転勤は単身赴任の予定とのことであった。

### 相談経過

支援開始は、夏休みが明けてしばらくたった、初秋という時期である。母親からの相談がきっかけで、海斗君（以下本児）が、「学校で問題児とされ、しょっちゅう呼び出されてパートもほとんど行けない。学校から発達検査と支援級への措置替えを勧められたが納得できない。」とのことであった。

こういう話はよく聞く。落ち着きのない子、先生の指示にまったく従わず反抗的な子、教室で切れて暴れる子、ちょっと勉強についてこられていないかなと思われる子等々。指示が通り、先生の思い通りに動く、所謂良い子ばかりを求め、そこ

から少し外れると、もう問題児とみてしまう、そんな先生がまだいる。勿論素晴らしい先生方もたくさんいらっしゃるのだが、一部に、「子どものことが好きじゃないんだな」と思われる先生がいらっしゃるのも事実である。発達障害者支援法が出来て10年以上になるのに、発達障害の理解も十分とは言えない。それでも学校現場は社会全体で見れば、理解のある方だと思う。本ケースは、発達障害者支援法が施行される以前の話で、ADHD が学級崩壊の原因であるという誤った考え方が少なからずあった時代の話である。

母親の訴えを聴き、本児の生まれてからの様子なども一通り聞いた。家族状況も最初に聞くことにしているので、前述の通り聴いている。母親自身は、知的にも問題なく、しっかりした印象で、家を建てたからパートに出て少しでもローンや子どもたちの学費の足しにしたいと思って頑張っていた。父親は仕事が忙しく、家のことや子どものことは母親任せになっている状況ではあった。

本児に会ってみたいと伝え、母子で一度相談に来てもらうことになった。当時筆者は、市のスクールカウンセラーとして相談を受けている立場であった。就学前の子どもであれば、保健師が関わっていることも多く、どのような母親で、どのような子どもなのか、健診の経過などを得ることもできる。就学と同時に資料が破棄されるのが普通である。家庭児童相談室でケースとして挙がっていれば、18歳までは保管される。この地域で暮らしてきた子であれば、本児のことを保健センターの保健師が覚えている、或いは弟のことで覚えているということもあるかもしれないが、本児は、その年の3月に転入したばかりである。以前住んでいた地域に問い合わせるほどの内容でもない。したがって、会って話してみても確認するか本児の状態を知る手立てはない。母親に本児を連れてこられるか確認する。「連れてこられる」という人や「連れてきます!」という人や、「母親の言うことは聞かないので、父親と相談してみます」など、反応は様々で、それによってある程

度のアセスメントが出来る。母親が子どもをどの程度コントロールできるかをこれで確認できる。また、子どもにどのように説明して連れてくるかを確認することもある。母親が説明できそうもなければどんなふうに言うかも一緒に考える。例えばカウンセラーについての説明の仕方や、連れてくるにあたっての説明として「お母さんは、あなたのこと何も問題ないと思っているけど、学校はそう思っていないみたい。カウンセラーはあなたの味方になってくれる人だよ。自分の味方になってくれる人を増やそう。」というような話や、「あなたにも言いたいことあると思うの。だからそれを聴いてもらいに行こう。お母さんがいない方が良ければカウンセラーと二人だけで話してもいいよ。」などなど。海斗君の母親は、「連れてこられる」と言ったので、特にどのように説明するかは相談はせずに、お任せした。

今回の来室日を調整して母親が帰った後、教育委員会の内部で、担任の先生について何か情報が無いか確認した。学級崩壊状態になっているとなれば、何かしら情報が教育委員会に入っていることも多いからである。確認してみると、そのクラスはかなり大変な状況らしく、担任がアップアップ状態で、精神的にも危ういとの情報があった。

数日後の放課後、母親と本児で来室された。本児は怪訝そうな顔で入室し、やや不貞腐れた態度で椅子に座った。小学校5年生と言えれば思春期に入っている。反抗期でもある。いきなり「カウンセリングに行くよ」と言われて、喜んで来る子などほとんどいない。喜んで来る方が問題かもしれないくらいである。したがって、まあその態度は想定内である。母親がどのように説明して連れてきたのか。学校でも先生にきつと叱られてばかりなのだろうから、また何かお説教でもされるのではと思ったとしても何の不思議もない。向こうが構えているならその構えを壊すしかない。

まずは自己紹介をして、「今日来てくれてありがとう。どんな風に言われてここに連れて来たのかな?」と聞いてみる。大体の答えは「特に説明もなく連れてこられた」とか「あなたと会いたい

って言われたから」とか「専門家に話を聞いてもらおう」とかである。大抵説明不足で、本人は納得していない。従ってまずはそこから始める。

「先日お母さんがいらして、学校のこといろいろお話してくれたの。海斗君は、担任の先生とあまりうまくいっていないみたいだから、その話を聴きたいなと思ってお母さんに連れてきてとお願いしたのよ。」等と、カウンセラーが会いたくてお願いしたという形を通す。そして、母親が同席でよいかの確認をする。母親があれこれ口を出すタイプの場合は、子どもと二人にしてもらうこともあるが、基本は子どもの意向を聴く。本児の場合は母親がいても構わないというのでそのまま母子面接となった。

いきなりそのまま学校の話をするのは、本児も嫌だろうから、まずは、本児の心をほぐすことをしなければならない。

「海斗君はどんな遊びが好きなの?」とか「何が得意なの?」「ゲームする?」など、まずは本児の興味関心のある話を探す。釣りが好きな子もいれば、スポーツが好きな子もいるが、まあ一番多いのはゲームである。当時も既にゲームは流行っていたので、振ってみると「ゲーム」と答えた。小中生の面談ではゲームの話をする人が多いので、筆者もゲームはあれこれかじっている。特に流行っているゲームはどんなものかくらいは見ておく。本児がその当時はまっていたのはモンハン(モンスターハンター)で、一通りその話を盛り上げる。そうすると本児の表情が段々緩んでくる。

ゲームの話をしているが、その間にやり取りがスムーズか、言語理解のレベル、体の落ち着きなどをついでに観察していく。雑談だけでもかなりのアセスメントが出来る。ゲームの話から、ゲーム以外に好きなことは何か、運動が得意か、どんなスポーツが好きか、音楽や絵を描くことなどはどうか、勉強では何が得意か等々、少しずつ聞いていく。好きな話で盛り上がった後だと、割合スムーズに答えてくれる。

その結果、本児は、運動も得意、特に走るのが

速い、リレーの選手、歌は好きだけど絵を描くのはあまり好きではない、勉強では理科が好き、算数はまあまあ、5年でクラス替えになったが、前のクラスの方が楽しかったし担任も良かった、今の担任は嫌い、クラスはみんなうるさく騒いでいるから自分もふざけている、友達は沢山いる、友達と喧嘩をすることもある、食べ物の好き嫌いはそれほどない等々様々な情報を得られた。話している間の本児の体の様子は、多少貧乏ゆすりが見られるものの、話をしっかり聞くことも、答えることもできるし、立って歩いたりということはなかった。多少室内外の刺激に左右されることは見られたので、注意散漫なところはあるのかもと思われた程度であった。発達検査をすればおそらく多少のばらつきは出るかもしれないが、あえて検査を進める必要性は感じないし、学校がどうしてもというなら検査を受けることも考えればよいかという程度であった。

いろいろ話を聴いた後、本児に、「いっぱい話してくれてありがとう。海斗君と話せて楽しかった。」などと感謝を述べ、「また話に来てくれるかな?困った時でいいよ。」と伝えると、「うん」と少しはにかんだ笑顔で頷いてくれた。これで関係性はほぼ構築できたと感じられた。

この間母親は黙ってやり取りを聴いていてくれた。この母親にも問題性は感じられないし、一対一で話すときの本児の様子からは、発達の問題が大きい、支援級への措置替えが必要などということは考えられなかった。

さてそうすると、本児の問題をどうとらえるかである。一対一だと問題ないが、集団になると不適応行動をとる子もいる。そこで、学級での様子を確認したいと思った。この件については、母親にも本児にも「一度学級の様子を見に行きたいけど良いかな?」と了承を得る。勿論、本児と筆者が知り合いという様子は見せないという約束もする。母親も本児も「構わない」とのことで、学校に電話をする。こういう時は担任にというのはなく、教頭に電話をすることが多い。ただ、教頭や校長などの管理職も様々なので、スクールカ

ウンセラーに対して好意的かどうか、どういう人物かなど、教育委員会の方で知っている人が居れば一応聞いてみる。当時は学校のことは学校がやるから入るなという感じの管理職もまだいる時代だったので猶更であった。確認してみると、校長も教頭も好意的だとのことだったので、教頭に電話をした。

母親の了解のもと、母親から相談があったこと、本児とも面談をしたこと、その時の様子なども一通り簡単に伝えて、学級の様子を見たいと伝えた。教頭からは学級の状態が落ち着かないので、教頭や担任外の先生などが時々入っているし、担任にも指導しているが、中々うまくいかない様子だとのこと、是非入ってみてほしいと言われた。

時間割を聴いて、こちらの空いている時間と調整して、日時を決めた。一応二時間目と三時間目の中休みを挟んだ二枠をお願いし、授業は体育や音楽と言ったものではなく、算数や国語のような、動きのない授業にしてもらった。

大抵学校で困る授業は、じっと座って勉強に集中してもらうものである。集中力が続かない子どもたちも多いので、あれこれ工夫が必要である。それも低学年ほど集中させるのが難しい。本児は5年生なので、ある程度集中することが出来て良い学年であるが、それも先生の持っていくかた、授業の展開の様子によるだろう。

参観当日、最初の25分くらいは、だれにも見えないように、廊下でじっとクラスの様子に聞き耳を立てていた。いきなり知らない人が入るといつもの様子が見られないからである。廊下にいると、先生の声がほぼ聞こえない。子どもたちが勝手にしゃべっている様子がわかる。立ち歩いているのだろう音も聞こえる。椅子が動く音、笑い声、物が落ちる音など、まあ騒がしい。担任は40代半ばの男性である。もっと大きな声はでないのだろうかと思いつつ聞いていた。国語の授業であるが、先生は何か黒板に書いていたり、教科書を読んだりしているのだろうか？教科書を読ませたりしているのだろうか？あれこれ想像しながらしばらく聞いていたが、途中で、教室に入った。

入るとすぐ何人の子が、「誰？」とか「誰かのお母さん？」とか見たことのない人の出現に、反応する子が出てくる。今は授業中なので、そうした質問には答えずに、ただ笑顔だけ返しておいた。担任に軽く会釈して、後ろでじっと見学していた。

見学していてまた驚いた。筆者の存在はそのうち忘れられて、廊下で聞いていた時と同じ状況が展開された。あっという間に子どもたちが勝手に大きな声でおしゃべりをはじめ、部屋の中を自由に立ち歩く子もいる。担任は教科書を片手に説明をしているが、前の方に座っている数名のみが一生懸命先生の話の聴こうとしているし、板書も書き写している。あとの子は、全く先生などいないような振る舞いであった。先生は先生で、うるさい子たちがいないかのように、淡々と小さな声で授業を続けていた。これでは上手く統制できるはずもないだろう。

国語の授業が終わった後の中休みに、先生と少し話をした。もう少し大きな声が出ないか確認すると、そういう元気がもうないとのこと。更に子どもたち一人ひとりの様子が見えているか確認しても、やはり、そんな余裕はないとの答え。先生自体、かなりお疲れで、鬱っぽくなっているなと感じた。

さてさて先生が潰れずに、このクラスを立て直す方法を早急に考えねばと思い、次の時間、筆者が子どもたちの様子を見る中で、子どもたち一人一人の良い点を探していくことにした。メモ帳を持ち、授業が始まる少し前の休み時間から教室に入って、様子を確認した。座席表ももらって、どの子がどの子かわかるようにし(最近の名札を付けていないので)、名前を書きながら、その子の良い面を探して一言書いていく。次の授業が終わるまでに、35人の児童全員に一言ずつ入れることが出来た。それを帰りの会で読んでもらうことにした。

3時間目が終わってから、先生にやってほしいこととして前述のことを伝えた。それだけなら先生に負担にならないし、先生自身が子どもたちの良い面に気づいてくれるのではという淡い期待

もあった。そして、最後に先生から「みんなもお友達の良い面に気づいたら先生に教えてね」と付け加えるよう伝えた。更に大きな声が出ないのであれば、注意を向けるために音を出すのも良いかも、ベルや手を叩くなどでも良いし、何か音楽でも良い、はやりのゲーム音楽とかも良いかもしれない、また、注意を向けてくれたら、いち早く注意を向けてくれた人に、「一番！」などと言ってみるのも良いなど、幾つか先生がそれほどエネルギーを使わずにできることを一緒に考えながら決め、更に眠れているか、食べられているか等先生の精神状態を確認し、眠れていないなら眠剤を使ってでも寝るようにと伝えた。眠剤は内科でも言えば貰えるのでと。先生も辛かったであろうと、その辛さを認め、共有し、頑張りすぎずにほどほどでやっていこうという、先生も少しほっとした様子であった。

その後しばらくしてもう一度授業参観に行ったが、その時は、クラスはかなり落ち着いていて、先生の様子も以前より力強くなっていたし、声も大きくなっていた。教室の後ろまでしっかり声が届かないと、子どもたちは先生の話の聞かなくなる。聞こえないから面倒くさくなるのだ。でも先生の声が聞こえると、聞くようになる。この時はその日の最後の授業で、終わった後帰りの会があったが、そこで先生から子どもたちへの褒め言葉が聞かれた。褒められた子への拍手もあった。小さなことでも、頑張ったこと、気遣いをしたこと、優しさを見せたこと、給食を全部食べたこと、片付けが速かったこと、掃除が丁寧だったこと、発表や発言が多かったこと、褒めどころは沢山ある。そして小さなことでも褒められた子は、照れながらも嬉しそうにする。クラスに笑顔が増え、先生にも笑顔が見られるようになっていた。

相談に来た海斗君の母親と二回目の参観の1か月後に面談した。母親からは、クラスが落ち着いたため、本児の措置替えの話は消え、本児も楽しく学校に行っているとの話が聞かれ、終了となった。

## まとめ

学級崩壊の原因を子どもの問題にしてしまうのはおかしな話である。子どもは未熟である。学校という集団生活に適應するのも中々大変なところもある。未熟な子どもたちを何とか成長させ、集団という社会に慣らしていくことが教育であろう。それが出来なければ社会に出ても子どもたちは働けなくなる。子どもたちを成長させるには、子どもたちの力を信じ、子どもたちを嫌わず、褒める、認める、そして、ダメなことはダメを通す、こうしたことが必要であろう。

先日ある支援級で、先生の指示が通らず、罵詈雑言を並べ立てる子に対し、暴れるからという理由で、一日中別室で YouTube を見せているという話を聞いた。支援級には情緒の子も多い。今は誰もがタブレットを持っている学校の状況が、子どもへの教育の場を奪っているのではないだろうか？集団での行動を修正するには、集団内でやっていかねば出来ない。そんなことは言うまでもないと思うのだが、まだこんなことが行われているのかと、嘆かわしく思った。学校現場でもこのような状態なのだから、社会で発達障害者が、その特性故に困ったときに周囲が理解し手を差し伸べてくれる社会など、ずっとずっと先のことになるのだろう。そんな今の時代から過去を見た時に、海斗君のように、子どものせいにされたケースがきっと沢山あったのだろう。そうやって育てられた子が大人になったときに、大人への不信感や学校への不信感を持つことになって、クレイマーと呼ばれているのではと思う。